

こころる便り

第216号

平成30年3月

〒679-1434
兵庫県たつの市新宮町大屋六六ハ一十二
株式会社 新宮運送グループ
代表/木南 一志
kininami@shingu.co.jp
電話 0799-1-75-1212

逃げてはいないか

お隣の韓国でのピョンチャン冬季オリンピックのメダル獲得に一喜一憂した二月でした。確実に春が近づき、やっと、という思いがあるのは、私どものような恵まれた地域に生きる者よりも豪雪地帯で埋もれながら生活してこられた方々のはずです。いや、まだまだ春の便りは遠いことでしょう。それでも、季節は確実に巡っていきます。メダルの朗報が届くたび、選手の努力と多くの人の支えが知らされて、喜びがまた大きくなるようないいニュースがたくさんありました。

やればできるマスコミが、なぜ日頃は暗い嫌なニュースばかりを広げていくのか不思議でなりません。

スピードスケートの小平奈緒選手を支えた相沢病院の理事長のコメントが、私には自分もこうありたいと思えるような、とても日本人らしくて嬉しい言葉で届きました。「たくさんのお金を出して名前が売れたところで患者さんが増えるわけでもない。今できることを全力でやる小平さんの生き方が好き。だから、人の心に何かを残すのだと思う。」とあった。

一所懸命に生きること。誰もが知っている言葉だ。しかし、果たして自分是一所懸命に生きていくのだろうか。感動を呼ぶのは、金メダルではない。懸命に自分の人生から逃げずに向き合っているか

どうか。他人からどう見えようが、そんなことは構うことはない。自分だけが知っている、懸命に生きているか。逃げてはいないか。

「人生は一度きり。」そして、その終わりはいつ来るのか誰にも分からない。だからこそ、真剣に生き切る姿勢が大事だといろんな方から教わった。いつまでも手を抜いて、「まあいいか」という生き方でいいのか。真剣に努力を重ねた選手でもメダルを取れると予想されながら、実力を発揮できなかつた人もいる。

力づくで取り組んで汗を一杯かいたなら、勝つことが約束されているとするならば、事は簡単である。それだけでは勝てない。

では、何が必要なのか。コイツを掴むのは自分なのだ。汗の中から、熱い思いの中から、自分にだけ降りてくる「天の声」かも知れない。修養団の伊勢道場に掲げてある「逃げてはいないか」という文字が今も私に迫ってくる。

今は亡き中山靖雄先生の笑顔とともに。

追伸 「綿毛にのって」第三集 卓上カレンダーができました。

福島への支援にと始めた活動ですが、ひと区切り、これで終わりになります。多くの皆様のご協力に感謝いたします。

被災地にこころるを寄せながら

木南 一志 拜

NPO法人 愛ランド様の協力で障害を持つ皆さんが宛名貼り、封入作業をしてお届けさせていただいております。

尋常小學校修身書 卷五 兒童用

第六課 公益 (つづき)

源六郎は又父の志をついで、此の地方の人々に養蠶を勧めて、繭の産額が村の内だけでも、年々八九萬圓以上になるまでにしました。又自分で多くの費用を出して、山に木を植ゑさせました。それが今ではりつばな森林になつてゐます。源六郎は農事の改良をはかる爲に、まだよそにないうちに村内に農會を設けて、その發達に力を盡しました。農會はそれからだん／＼全國にいきわたりました。源六郎は又村に勤儉貯蓄の風を興さうとつとめました。或時、村の人々と申し合はせて毎日一厘づつ積立てる一厘貯金といふことを始めました。それを賛成する者が多く、後には全村で二萬圓以上の貯金となりました。又村に悪い風がはいつて来て、仕事を嫌つて遊ぶ者や借金に苦しむ者が出来ました。源六郎はそれを心配して、村の人々と規約を設け力をあはせて、この悪い風をなほすことに骨折つたので、村の風儀もよくなりました。

